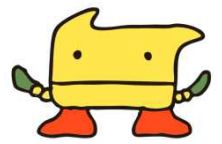


嬉 望

第 3 号
平成26年5月30日
兵庫教育大学
教職大学院
学校経営コース
大学院生編集部

「嬉望」は、本学加東キャンパスが嬉野台地区にあることと、「希望」とをかけた造語です。



ひょうちゃん
大学マスコット

学長の思いに触れる

中教審の答申等も受けつつ、今後の教育界の方向性が、少しずつ見えてきました。教育委員会制度についても国会において審議され、地教法の改正がなされようとしています。そんな今、学校経営コースの学生がどのような力を付けることが望まれているのでしょうか。

そこで、本学の加治佐学長にインタビューし、本コースの学生に期待すること、また、教職大学院として、今後本学の目指す方向性などについてお話をうかがいました。

【加治佐学長プロフィール】

加治佐 哲也(かじさ てつや)
平成22年学長就任。平成9年、九州大学より博士(教育学)を授与。日本教職大学院協会会長。専門は学校経営、教育行政。主な著書は、『アメリカの学校指導者養成プログラム』(多賀出版、2005年)、『ハイレベルな学校管理職を育てる』(編著、学事出版、2011年)など。中央教育審議会委員、独立行政法人教員研修センター評議員、教員養成評価機構理事。



加治佐学長へのインタビューを行う
山口県周南市立岐陽中学校
松岡 千鶴 教頭(2年生)

「学校経営コースの学生に、どのような学びを期待されていますか？」

先生方がコースにいられている目的が明確です。管理職になるとか、教育行政職に就くということですから、そのための力量をしっかりと身につけてほしいと思っています。

二年間、現場を離れて、大学院で高度な教育を受けることになり。いつもみなさんに

お話ししているように、みなさんは、地元の学校教育や教育行政のレベルアップを図ることを期待されています。一つの学校の校長になる・・・そういうことではなく、地元に戻ることによって、地域の教育行政や学校教育のレベルが上がる・・・そういう存在にならないければいけないということ。

「そういう力量を身につけるにあたり、学校経営コースの学生へのアドバイス等をお願いします。」

本学のカリキュラムが、先生方の学校経営における実践力の向上と結びついていなければならないと思っています。

また、私は、あらゆることが学びであると考えています。本学へ来て、いろいろな出来事と出会い、いろいろな人と出会い、それらすべてが学びになるという自覚が必要であると考えています。先日、キャンパス・クリンデーで掃除をしましたが、それも一つのよい例です。また、学部生やこれから教

員になろうとする人たちと付き合うのもそうです。一見無関係に見えて、決してそうではない。今の学部生たちの気持ちから分らない人が、リーダーにはなれないと思います。

時折、自分の抱えている課題にしか目が向かない人がいます。だから、現場を知らない人や自分がコミュニケーションできない人と付き合おうとしない、それではリーダーにはなりません。

「教育改革の流れの中で、全国に教職大学院を設置しようという動きもあります。その中で、本学の教職大学院や学校経営コースとして果たす役割について、お考えをお聞かせください。」

先に文科省で、本学のミッションの再定義をしました。本学は、「日本の大学院における現職教員の再教育拠点」と定義されました。

今実施している兵庫県ニューリーダー研修も、その一つの典型的な例です。全国に類を見ないと思います。11年目になります。リージョナル機能として、地域の核となる人材育成も担っているという側面がありますね。

また、本学は全国拠点として

の役割を果たすため、それにふさわしいもの、他でできないことをやるということです。

具体的には、それぞれの分野で、よりレベルの高い指導者を養成するということです。例えば、今研究中ですが、特別支援教育のスーパーバイザーもそうです。また、校長養成にしても、単なる一校の校長ではなく、地域の指導的な立場の方の養成です。

本学の教育行政カリキュラム開発室で研究中の、教育長養成の取組も行います。下村文科大臣と先日お会いし、お話ししました。5月9日の衆議院での答弁でも、兵教大が今後行おうとしている全国展開の取組に触れられ、全面的に支援したいと答えておられました。これも一つの大きな潮流となります。今後の教育界を俯瞰しつつ、本学もさらに新たな段階を迎えようとしています。



今後の取組について語られる
加治佐学長

大学院説明会・オープンキャンパス
 5月10日(土)
 本学加東キャンパス

去る5月10日(土)、本学大学院の説明会も兼ね、オープンキャンパスが開催されました。学校経営コースも普段の授業の様子を来場者にご覧いただき、毎週金曜日に開催している課題研究を、本学図書館地下一階ライブラリーホールにて実施しました。

先進校事例を追検証する事例発表、現所属校・機関についてプレゼンテーションを行う現任教描写を一年生が行っている模様を、多くの見学者に見ていただきました。



現任教描写を発表する
 兵庫県三田市立高平小学校
 小川 晶弘教諭(1年生)



先進校事例を分析・発表する
 兵庫県立松陽高校
 井上 政行教諭(1年生)



加治佐学長から、学校経営コースの一同に、激励の言葉をいただく。

また、夜間コースの学生もともに聴講し、よい学びの交流になりました。

さらに、加治佐学長が激励に訪問され、「学びは人それぞれ。各自が『元気になつて』各地へ帰ってもらえるのが一番」とのお言葉をいただきました。

ぜひ兵庫教育大学で学びたいと多くの方に思っていただけけるよう、在校生がより学びを深めなければ、との思いをさらに強くしました。



質疑応答の場面を、真剣なまなざしで見つめる参観者のみなさま

ゲストティーチャー情報

【開かれた学校づくり実践演習】

大阪府立阪南高校

校長 塩見 善則先生

5月13日(火)

開かれた学校づくりの実践事例として、和歌山県新宮市立光洋中学校の実践についてお話を聞きました。

光洋中学校は平成14年度から文科省による「新しいタイプの学校運営の在り方に関する実践研究」の指定校で、特に校長の裁量権拡大について研究が進められました。

塩見先生は、平成15年度、公募制の校長として光洋中学校に着任されました。「地域との連携にあたり、アメリカ型チャータースクールのイメージで学校の資源を地域に開き、地域資源を学校に採り入れた」と話されました。現在のコミュニケーションスクール始祖として、新規性の高い取組を進める上での苦勞も垣間見ました。



新宮市立光洋中学校での取組を紹介される塩見 善則校長先生

トンガとの国際交流

現在本学にトンガから留学中のサミーさんが自国の文化や教育について紹介する会が、5月9日(金)に開かれ、2年生が4名参加しました。

当日、サミーさんは、トンガでの礼装でお見えになり、文化や風習、教育制度、さらに、現在トンガが抱えている教育上の諸課題等を英語で説明されました。帰国後、サミーさんは教育改革の旗手としての活躍も期待され、ぜひ日本での学びを生かしたいと抱負を述べられました。



現地では、英語教員。専門は、保育。「教育の質的向上」が課題と述べられる、サミーさん

フィールドワーク情報

【神戸市立兵庫中学校北分校訪問 5月14日(水)】

神戸市に2校設置されている夜間中学校の一つ、神戸市立兵庫中学校北分校を、1・2年生が訪問しました。

夜間中学校は、法的には学校教育法施行令第25条の「二部授業の規定」が唯一の根拠というのが通説のようですが、確固たる設置基準はないのが実情です。しかしながら、すべての人に義務教育を保障する上で、大切な役割を担っています。

北分校では、始業前の0時限目に行われる、希望者を対象とした日本語指導から一日の生活が始まります。諸事情により義務教育課程を修了できなかった方、また、結婚等で来日された新渡日と呼ばれる外国人の方など、様々な方が学ばれています。教材も習熟度に対応できるよう手作りが多く、授業にあたっては、必ず複数名の教員が支援されています。

当日は、1年の理科、2・3年の社会、全学年の美術を参観しました。日本語による授業で、その都度日本文化や言葉の解説も交えた授業風景でした。真剣に学ぶ生徒さんの姿が印象的で、教育の根源的な部分に触れた気がしました。



美術の授業。担当する日本語の文字を木彫。組み合わせ、最終的には校歌のパネルになる。